

楽しく
読んじゃう

小社発行の「看護学事典」の執筆者の皆様に、
事典で解説していただいた用語にまつわるエッセイをご執筆いただきます。

新看護学事典

Vol.09

清水耕一

日本赤十字社中央病院救護看護人養成所1期生。精神科看護に熱い情熱を持ち、
明治から昭和初期にかけ、東京府巣鴨病院（後の東京都立松沢病院）に勤務。

Takano Tomomi

日本赤十字看護大学精神保健看護学講師

鷹野 朋実

精神科看護の礎

私が東京都立松沢病院という精神科病院の看護師だったころ、院内図書室で「至誠の人 清水耕一君」と題された、明治から昭和初期に松沢病院（前身の巣鴨病院も含む）で勤務していたある看護人の生涯を綴った冊子を見つけました。これが、私と清水耕一との出会いです。清水には、日本赤十字社の看護人として戦時救護に従事したり、多数の読者に支持された著書『新撰看護学』の執筆など、さまざまな業績があります。

清水は、松沢病院の医療・看護の^{さんたん}惨憺たる状況を改善しようと、精神科医の呉秀三が病院を大改革していたころの看護長です。呉は、清水に絶大な信頼を寄せていたそうです。これ

を知った時、18世紀、フランスの精神科病院で“鎖からの解放”を行った精神科医ピネルの傍らで、彼の改革を支えた男性看護人ピュサンを想起しました。清水も、呉の病院改革にかかわっていたかもしれません。病院が巣鴨から移転した直後に以下のようなことがあったと、そこに居合わせた医師が後に述懐しています。

新しい松沢病院の塀は、呉の“病院と周囲の境界は簡易に”という主張から、従来の頑強な塀ではなく大部分が生け垣と簡素になりました。そこで清水が「これでは私たちは仕事ができない」と呉に言ったのです。「この塀では患者が簡単に離院してしまい、大変だ」ということなので

しょう。すると呉は、「病人の囲いは看護人の目で行いなさい、垣根に頼るからいけない」と答えたそうです。

これは、本音をもらした清水が論じられた場面とみるのが普通でしょうが、呉の信頼厚い人物が果たしてそのようなことを言うのでしょうか。私には、「患者の安全は、物ではなく医療者のかかわりで守れ」という非拘束の理念を周知させるため、2人が仕組んだ会話のように思えるのです。

近年、ピネルの“鎖からの解放”は実はピュサン主導で始まったことを示す史料が発見されました。もしかしたら、清水耕一の病院改革への具体的関与を記した史料も見つかる日が来るかもしれません。

日本で唯一、看護職だけの執筆による事典。
待望の第2版ができました。

【総編集】見藤隆子・小玉香津子・菱沼典子

看護学事典 第2版 | 定価 (本体6,600円+税)

A5判/横組1200頁/2色刷 ISBN 978-4-8180-1601-9

本書は単なる辞典(ことばの解説)ではなく、
看護学領域における事典(ことからの解説)として編集しました。



項目語

約4500語

約500語追加

索引語

約1万4000語

約2000語追加

お問い合わせ・販売はコールセンターまで
Tel.0436-23-3271/Fax.0436-23-3272
<http://www.jnpsc.co.jp/> 日本看護協会出版会